



## 河芸町上野の弘法井戸

江戸時代に伊勢街道の宿場町であった河芸町上野。大名や幕府の役人らの宿泊施設である本陣や脇本陣などがあったその中心に、瓦ぶきの小さな屋形があり、中には「弘法井戸」と呼ばれる石組みの井戸が、さらにその奥には「弘法大師御加持水」と書かれた扁額を掲げるお堂があります。



弘法井戸は、長さ2mほどで貯水槽のような形をしています。水面は少し手を伸ばせば届きそうなところにあり、水深も1mほどの浅い井戸です。



弘法井戸(手前)とお堂(奥)

この井戸には、地元で語り継がれてきた伝説があります。この地を訪れた弘法大師(空海)が、喉の渇きを癒やすために村人に水を所望しました。この村は鉄分の多い水しか出ない土地であったため、村人が遠方から水をくんできて提供したところ、お礼として持っていた錫杖で良質な水が湧くこの場所を指し示して教えてくれたというものです。この井戸がいつからあるのかは定かではありませんが、江戸時代にはこの地の生活用水として、また街道を行き交う旅人の喉を潤す水として利用されていたようです。

この井戸は、かつてこの地にあった「弘法

田」と呼ばれる水田の収益を充て維持していたそうですが、戦後の農地改革によって弘法田は無くなりました。その後は、近隣の家々で組織する「弘法講」という集まりが、井戸やお堂の維持管理に当たっています。

今でも毎年4月21日に行われる「弘法まつり」では、弘法講が中心となって餅をついて鏡餅などをお堂に供え、残りの餅は丸い小餅にして、お参りにきた人々に配られます。

弘法大師にまつわる水や井戸に関わる伝説は全国各地にあります。鉄分が多く、良質な飲料水の確保が困難であったこの地においても、古くから水を提供し続け、人々の生活を支えてきた重要な井戸であったことから、いつしか弘法大師の伝説と結び付いたものと思われる。

昭和36年に河芸町上野一円に上水道の給水が開始され、この井戸が生活用水としての役目を終えてから約60年が経ちました。現在、弘法講は4軒になってしまいましたが、弘法大師の伝説や信仰は、今もこの地で大切に伝えられています。

